



# 教職大学院 Newsletter

# No. 64

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.6.21

## 教職大学院の充実発展を願って

北海道教育大学名誉教授 村山 紀昭

昨年10月に、教職大学院を今後の高度専門職の基本的方向とする文科省協力者会議の報告書がようやくまとまり、ほっとしています。中教審の特別部会での検討以来、途中政権交代を挟んで3年あまりかかりました。正直、途中でボツになるかと危ぶんだこともありました。

### 1 教職大学院への思いの原点

教育学は専門外ですし教育実践の実際にも疎いのですが、教職大学院への思いは強いです。

もう15年程前、北海道教育大で1999年に学長になる直前、長年やってきた国際交流関係で、国際教育シンポジウムが大学内でありました。そこに留学生交流を始めてまもなくの、カナダ・カルガリー大学教育学部長が参加しスピーチをしました。

その内容は極めて刺激的で、当時カルガリー大学では大改革し、「Master of Teaching Program」というまったく新しい実践重視の教員養成の修士コースをつくったという話でした。

総合大学の伝統的な西洋哲学出身で、教育や教員養成について何も知らないまま教員養成大学に勤めましたが、ほとんどが教師になるゼミの卒業生に対して自分が何をできるのかをずっと考え込んでいました。

そういう中で、学部卒業後1年間、ほとんど学校現場に行き実践の中で教師としての資質を磨くというカルガリー大の話は凄くインパクトがあったのです。

(この時のスピーチの抄訳をブログに掲載してあります。今でも価値のある論稿かと思えます。→ <http://huedu.blog.fc2.com/blog-entry-14.html>)

### 2 教職大学院設置審査と「学校拠点方式」

で、学長になってから8年間、法人化とキャンパス再編で忙殺されましたが、教員養成についてはいつも

このカルガリー大のことが頭にあり、もっと実践的で地元教育委員会と連携した教員養成にしなければの思いでした。

そして任期の終わり頃、法科大学院等のあとによりやく日本でもカルガリーの修士コースに似た教職大学院の設置準備が始まりました。たまたまですが、文科省や国大協の設置構想段階から宮教大横須賀学長(当時)さんたちと一緒にその一員になり、設置後はその審査会の座長を最初から務めました。

何せ、初めての教員養成に関する専門職大学院。どういう基準で各大学のカリキュラムなどを評価すべきかまさに手探りでした。そういう中で福井大学の教職大学院の「学校拠点方式」に出会い、何度かラウンドテーブルにも参加し、これぞカルガリーなどカナダで行われた教員養成改革につながる道だと確信しました。

また、少し専門職大学院の理論についても勉強し、ショーン(さらにはその後のコルトハーヘンなど)の

## 内容

- 教職大学院の充実発展を願って (1)
- 5月合同カンファレンスに参加して (2)
- 堀川小学校教育実践研究発表会に参加して (5)
- 福井大学教育地域科学部附属中学校  
教育研究集会に参加して (6)
- インターンシップ/  
週間カンファレンス報告 (9)
- 平成26年度第1回運営協議会 (12)
- Staff 紹介 (14) 院生紹介 (16)
- 研究紀要・実績報告書の紹介 (19)
- 研究紹介 (20) 書評 (22)
- 教育学研究科学生募集スケジュール (24)

「省察的実践家」について、なるほどカナダの展開はこうした国際的な動向に沿ったものだったのかも知りました。福井大の寺岡さん、松木さん、柳沢さんらがこうした動向や理論を熟知した上での「学校拠点方式」だということも分かりなるほどと思いました。

### 3 理論と実践の往還と省察

1 昨年9月にスタートした中教審答申具体化のための協力者会議では、教職大学院の充実発展のために政策的な位置づけだけでなく、理論と実践の往還など専門職大学院としての理論的展開をできればと思っていましたが、なかなか会議ではそこまで議論ができませんでした。率直に言って、まだまだ教員養成に関するアカデミズムとプロフェッショナルリズムとの相克が底流に残っていると思います。

その理論的実践的整理と展開が十分報告書でできなかったのには悔いが残っています。しかし、来年度から新たに始まる全県への教職大学院の拡充の中で、実践的にこの問題が乗り越えられていくことを切に願っています。

一つだけ、誤解なきよう、学校現場を重視した教職大学院の有り様は、決して教科専門の深いアカデミックな研鑽などを無視するものでないということを。

その上で、焦点は、理論と実践の往還と省察の具体的内実をとことん問うことにあると考えています。教職大学院が議論されてから、理論と実践の融合・統

一、省察が盛んに言われています。しかし、言葉だけが一人歩きしている感もなきにしもあらずではないでしょうか。

この間、福井大の実績もあって、ようやく週2～3日の長期学校インターンシップやその間の週1回の省察カンファレンスが多くの大学で行われるようになってきました。しかし、私見ではまだまだその内実は検討の余地があるように思います。

「実践の中での省察（ショー）」とは何なのか、そのために大学教員に何が求められるか・・・これをとことん解明し展開することなしに教職大学院の将来はないとまで思っています。

そのために、「省察＝リフレクション」について実践的な理論化が必要なのではないのでしょうか。最近、ショーを継承し発展させたオランダのコルトハーヘンの主著の訳者武田信子さん（武蔵大）が、「リフレクションワークブック」を出しました。先日北海道教育委員会の研修担当者を交えてご本人と長時間ディスカッションしましたが、このまま大学院レベルで使うのには少々難があるとはいえ使いようによっては大変有益です。

教職大学院が、法科大学の難航を尻目に第2段階の発展に向かうために、教師の資質を確実に上げる教育システムとして理論と実践の往還、省察についてそろそろきちんとした理論展開が不可欠だと痛感しています。

## ◆ 教育改革の展開を踏まえ、長期的な実践の展望をひらく

May

## 合同カンファレンスに参加して

### スクールリーダー養成コース2年／至民中学校

古市 利明

5月の合同カンファレンスの中で、一番印象に残ったことは、高浜中学校の清常先生のお話でした。先生から、昨年度から今年度にかけての高浜中の研究方針などをお聞きして、2年前の至民中と共通する部分がたくさんあって、心の中で何度も頷いていました。特に、学校のたて直しには「授業」「生徒の心の育成」が大切であるというお話には納得しました。昨年度の至民中も「授業」については、まず学習環境や学習規律を整えることで、意図的なエスケープや遅刻は無くなりました。そし

て、基礎基本をしっかりと身に付けさせる授業から、これまで取り組んできた至民式問題解決学習へとめざしていきました。今年度は、高浜中と同様、生徒たちの学習意欲を高めるために、教材や課題などで、生徒たちが知的な好奇心を持って取り組める授業を工夫して行っていくことを、4月の会議で確認しました。

また、「授業で生徒指導を・・・。」というお話もありましたが、昨年度から、至民中も小中連携で、忘れ物・遅刻・挨拶などの学習ルールを小学校の先生方と設

定し、当たり前のことをきちんとしていくことから取り組んでいます。小学校の先生方がとても協力的で、至民中も頑張らなくてはいけないと感じています。

「生徒たちの心の育成」については、至民中は「自己有用感を高めていく」ことを重視し、スクールプランの中でも組み込まれています。至民中の生徒たちは、これまでのクラスターでの取り組み（縦の関係）に、学年の連携（横の関係）、保護者やサポート至民をはじめとする地域の方々・院生やライフパートナーなどの協力（ななめの関係）により、多くの人たちと関わる機会を設けています。また、学校行事や地域の方々との行事も数多くあるので、これらの人材や行事などを有効に活用していくことで、生徒たちの自己有用感を高めていきたいと考えています。

さらに清常先生の発表の中で、『4つの「つながる」を意識した授業実践』を紹介されていました。「教師とつながる」「生徒同士でつながる」「教材とつながる」「生徒の成長につながる」という4つの項目は、授業をつくっていく時に、自分自身強く意識していかなければならないと感じました。

その他、2回のグループセッションでは、各学校の取り組みの様子や今後の展望などをお聞きすることができました。また、同じ教科でグループになり、各校の実践記録をもとに、授業づくりに関する話もじっくりとすることができました。

合同カンファレンスに参加するようになり、2年目となりました。まだまだ、上手に話をしたり、思いを伝えたりすることはできませんが、大学や他校の先生方、院生の皆さんがじっくりと話を聞いてくださり、さらに、それについて助言やお話などをしてくださるので、大変自分にとってカンファレンスの時間はプラスになっています。いろいろな先生方とお話したり、各学校の様子などをお聞きしたりすることで、自分にはない新たな考え方を教えてくださり、また頑張ろうという気持ちを起こさせてくれます。このような学びの機会を与えて下さったことに感謝し、今後もいろんなことを吸収していきたいと思います。

## スクールリーダー養成コース1年／春江小学校

### 山田 俊行

5月の合同カンファレンスに参加した。教職大学院に入学して、2回目のカンファレンスである。4月のカンファレンスでは、「3つの種」の課題が出て、それについて発表するということが事前に知らされていたため、予め心の準備ができていたが、今回は事前の課題もなく、内容が分からなかったもので、少々不安を抱えながらの参加となった。

4月のカンファレンスでは、事前にレポートを作っていたにも関わらず、グループ討議の発表場面では、汗だくになった。特に自分の理解が中途半端だったり、頭の中でまとまっていなかったりすると、焦りが焦りを呼び、吹き出てくる額の汗を何度もぬぐった。今回は2回目ということもあり、緊張感はやや薄らいでいたものの、初対面の先生方を前にして話すというのはなかなか慣れないと感じた。

午前中は、「それぞれの学校で動き始めた状況についてグループで語り合い、捉え直し展望を開く」と題してのセッションであった。

最初に高浜中学校の清常徹先生が「つながる」という言葉をキーワードとしての取り組みを発表された。過去の生徒指導の経緯を踏まえて、指導上の問題解決に向けての取り組みを展開する中で行き着いた結果が、「確かな学力を身につけさせることが生徒指導上有効である」ということだと話された。そこで「教師とつながる」「生徒同士でつながる」「教材とつ

ながる」「生徒の成長につながる」という4つの「つながる」を意識しての授業実践を進めていくと話された。また、授業研究の形態や教科指導を支える部会の編成についても、昨年度までの反省を生かしながら工夫されていた。研究副主任という立場にいなながらも、迷いが多く、学校全体の研究の方向性を明確に定め切れていない自分にとっては大変参考になった。

その後、グループ内のメンバーがそれぞれの現況を語った。私は、本年度の勤務校の取り組みである道徳教育の現状について報告した。4月の合同カンファレンス以降、道徳中央研修の課題作成や運動会の計画、指導主事訪問の全体授業の指導案づくりなど、目の前の課題をこなすことに精一杯で、学校全体のことを考えている余裕などなかった私は、微々たる内容しか報告できなかった。しかし、セッション後、同じグループにいた附属小学校の青木先生から、付属小で有名講師を招いての講演会を開くことや、授業についての情報交換をしたいというお言葉をいただいた。願ってもないことで大変ありがたく、こういうネットワークの広がりが大学院で学ぶメリットだと実感した。

午後の「実践研究の記録を読む」では、中出航司先生の「協働して学びを深める体育の授業をつくる」を取り上げた。短時間で読んだものを、簡潔にわかりやすく内容を伝えるというのは非常に難しく、自分で分かっているつもりであっても、相手に伝わっているかどうか不

安であった。この実践は「体づくり運動」を題材として、子どもたちが協働して学びを実感し、考えを広げたり深めたりできるようになることをねらった実践である。ペア活動やチーム活動を取り入れた場の工夫、共に運動することを楽しむ学習集団づくり、デジタル機器の活用という3つの視点を機能させることで、コミュニケーション能力の向上を図られていた。自由度のある題材に取り組む中で、子どもたちが互いの運動を観察し合い、意見を交わし合いながら、運動の内容を工夫し、自分たちで器具や場を作らようになっていく様子は、中出先生の深い教材研究と、しっかりした児童把握の賜物で

あると感じた。

カンファレンス終了後、「授業を見る視点の整理」と題して木村先生の特別講義があった。ストレートの先生方対象ということであったが、「見る視点」の裏をかえせば「見られる視点」とも考えられるので、今後の参考に受けさせていただいた。間近に研究授業を控え、授業研究会の持ち方を考えなくてはならない立場の私には、毎回の研究会のねらいを明らかにし参加の先生方にも周知することの重要性を考えさせられた講義であった。

## 教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属小学校 山越 翔太

5月17日(土)に、5月期の合同カンファレンスが行われた。この日のテーマは、「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というもので、拠点校の研究について話し合うセッションが午前のメインだった。私個人は、週一回のインターンで、なかなか全体研究会に参加できていなかったもので、正直不安があった。

昨年度の合同カンファレンスで、「自分自身に“人に語れるだけの実践経験”がないと、話に入っていくことが難しくなる。」ということが分かっていたので、この日の最初は苦痛かなと思っていた。しかし始めてみると、そういうことは全くなかった。むしろ、話の内容は「子どもたちの動きに合わせて、教師がそれに対応できる協働探究的な集団(コミュニティ)をつくる」というもので、私が研究テーマにしていることに非常に近いものだったのでとても話が弾んだ。

私が研究テーマにしていることは“人と人とのつながりを意識した集団(コミュニティ)と授業づくり”である。特に教科専門の数学と昨今教科化されるという道徳を中心に研究を進めている。(とはいえ、道徳は何を足掛かりにしてよいのか分からず、スタートラインに立てずにいるのが現状だが…)テーマの中で特に意識しているのが“つながり”である。教師と子ども、教師と教師、子どもと子ども、教科同士など、様々なつながりを考え、信頼関係を築くことで、よりよい学校文化、授業をつくることができると考え、授業を構想している。このセッションで上がった「協働探究的な集団」という言葉を筆頭に、少なくとも私の研究テーマに引っかかってくる(と思われる?)キーワードはいくつか存在した。その言葉同士がうまくつなげていけるように“人と人が語り合う場”。それが合同カンファレンスではないかと考えた。

午後は、「専門教科・領域の授業づくりとカリキュラムマネジメントに関する実践記録を読む」ということ

で、私は附属小学校の5年「面積」、6年「文字と式」の実践を読んだ。ここで、気になったのは「算数科の学習のおもしろさとは、答えにたどり着くまでのプロセス(考え方)が多様であり、その多様な考え方を共有することで新たな発見ができることにあると考える。」という言葉である。先の時間で気になったもう一つのキーワード“子どもを見取る価値のある授業を創る”ヒントになっていると思った。その後のセッションでは、数学の先生方と様々な話をした。先のキーワードに関して言えば、「苦手にさせず、より意欲を持って子どもたちが授業に取り組むためにはどうすればいいのか?」という問いや「子どもにとって“日常生活”とは何か?」という問いがこのセッションで出てきた。(ただし、キーワードはあくまで私自身が内に持っているだけで、他の先生方に話してはいない。)特に2つ目の問いは、私自身の授業実践を振り返る上でとても大切な視点であった。私は小学校3年生の「一億までの数」で、1mm×1mmの正方形を一億個集めた大きさ10m×10mの正方形をクラスのみinnで一緒に作った。「教師と子どもたち、子どもたち同士をつなぐこと」と“一億”という数の大きさを体感すること”を目標に行ったが、果たしてこれは日常生活に結びついているだろうか。また、「小数」の学習では、ツボに入っている水の量を測ることを導入にしたが、これも“子どもたちの視点から”日常生活に結びついていたのかが分からなくなった。子どもたちの視点から授業を振り返ることも大切であることをこのセッションで気付かされた。(セッションの目的とは少し違うかもしれないが…)。

異校種、同校種の違い、異教科、同教科の違い、そして、インターン生、現役教員の違いから様々な意見が交錯する。それがこの合同カンファレンスの醍醐味だろう。しかし、この時間を有意義なものにするには、自分の核となる「柱」(「研究テーマ」や「大切にしたい思い」など)が必要となる。今回の私のように、最初は

テーマを見て厳しいものになるかと思ったが、自分の研究テーマとつなげて考えれば、より多くのことを考えることができる。また、授業実践に関しても、1回振り返ってもう終わりではなく、また違う視点から振り返ってみるのも面白いと思った。それに気づかせてくれるのもまた合同カンファレンスのよい所である。

私は自分の核となる「柱」をこの教職大学院当初からしっかりと持っていたが、それでも途中でぶれてしま

うこともあった。しかし、合同カンファレンスや6月中旬に控えているラウンドテーブルなどの場での“人との関わり”を通して切り抜けることができた。自分の「柱」がしっかりとできて「今」、様々な人と話をして、様々な意見を交差させて、よりよい集団、授業づくりができるようになればと思う。

富山市立堀川小学校

## 教育研究実践発表会に参加して

スクールリーダー養成コース2年／名田庄小学校

赤井 孝行

5月30日（土）、富山市堀川小学校へ行って来た。教職大学院に入るまで、同じ堀川でも京都の堀川高校の名前は知っていたが、富山の堀川小学校のことは全く知らなかった。大学院には堀川に関する文献が多数あり、行ってみたいと思うようになっていた。

4年生の算数「くらしに見つける億と兆」の授業を参観することに決めていた。私もちょうど、同じ単元をしているところであった。参考にさせていただきたい気持ちで、1限目の算数の授業の開始を待つことにした。

子どもたちはバンダナを頭に巻き、雑巾を手に廊下掃除をしていた。今までに見てきた掃除の活動と何かが違う。子どもたちは意欲的に雑巾をかけたり、ほうきではいたりしている。一人ひとりが、きれいにしようという目的意識をもって取り組んでいる。掃除をしている子どもたちは、先生や来校者の存在を意識することなく、あいさつをするとていねいに落ち着いてあいさつを返してくれた。

廊下には、いろいろな大きさの三角形・四角形・円を使ったお城の水彩画が掲示してあった。どの作品も掃除やあいさつのようにていねいに描かれていた。しっかりとした目的意識をもって取り組んだ作品であった。

朝活動という名の掃除が終わると、4年生の子どもたちがそれぞれの掃除場所から教室へと帰ってきた。少し遅れた子は、クラスメイトに「遅れて、すみません。」とていねいに謝っていた。担任もクラスメイトも、しっかりと遅れてきた子の言葉を聞いていた。全員が揃った。「おはようございます。」の声は、教室中に響き渡った。その後の健康観察も大きな声であった。掃除と同じように、意欲的である。くらしのたしかめの時間が始まった。

S君の家族で行ったいちご狩りの話から始まった。妹が青いいちごとったことについて、担任はS君に質問をしていた。クラスメイトも担任に続いて、S君にいちごの大きさや食べた数、いちご以外のものを育てていたか、初めての経験なのかなどいろいろと質問をしていた。S君は一人ひとりの質問に答えていた。質問した子どもは、自分のいちご狩りの体験やそれに似た体験を語っていた。自分のことを話す前に、人の話をしっかりと聞いて質問をしていた。担任は、子どもたちの体験談にタイミングよく質問をしていた。いちご狩りの話題で始まった活動が25分間続いた。家族の愛情という内容にまで、話が膨らんだ。35名のクラスであるが、一人ひとりが話をよく聞いていた。話をしっかりと聞き、自分の体験と照らし合わせる姿は素晴らしかった。くらしのたしかめの時間をしっかりと見ることができたことはよかった。堀川小学校の子どもたちの素晴らしさの源は、この時間にあると感じた。

学校要覧を見ると、くらしのたしかめの時間の子どもたちに期待する高まりとして、「自分や仲間の感ずる心の背景を互いに聞き合い、共感を深める。」と記してあった。話すことよりも聞くことを大切にしていることが分かる。実際、子どもたちはクラスメイトの話を意欲的に聞いていた。

参観予定の算数の授業が始まった。課題が板書された。授業の進め方はくらしのたしかめの時間と似ていた。Y君が、「お米のことをはっきりさせたい。」と、紙に貼られたお米の粒を見せて説明を始めた。「1合には3400粒のお米があり、一日3食で1合食べると12000粒。1ヶ月では、214万2000粒、1年で・・・粒。でも、まだ1億にもいかないから、兆

まではいかない。」担任は、「なぜ、1億、1兆をたしかめてみたいのかな。」と聞いていた。Y君は「1億、1兆のお米を食べるには、どれくらいかかるか調べてはっきりさせたい。」と答えていた。学習課題がY君のものになっていた発言であった。落ち葉の数で取り組んでいたK君も、「1100枚しか集まっていないから、休み時間などに集めたい。」と意欲的であった。草の数を数えていたSさん、時間で兆を見つけたいIさん、富山市のゴミの量で取り組んでいたG君たちは、それぞれ意欲的に取り組んでいた。それぞれが一人ひとりの学習課題になっていた。

一人ひとりの学習課題に対する取り組みの経過を発表するとき、自分とは違う取り組みにも関わらず、しっかりと聞いていた。くらしのたしかめの時間と同じであった。S君は昨日の授業でクラスメイトの話聞き、自分の取組を省みた。S君の探究はクラスメイトの探究と絡み合って、さらに深い探究となっていたのである。

堀川小学校の研究集会を終え、子どもたちが熱中して取り組める学習課題の大切さを感じた。私もくらしの中で身近な学習課題で学び合いを進め、子どもたちに力をつけていこうと思った。

福井大学教育地域科学部附属中学校

## 教育研究集会に参加して

武生第一中学校／教諭（教職大学院 平成21年度修了生）

青柳 宏治

私は今回の研究集会で、1年社会科の授業を参観させていただいた。

この授業は、まず、EUができたのはなぜか、EUの政策は何かといった、前時までの学習内容の確認からスタートする。そこで出た意見を、「関税」「通貨の統一」「出入国」「資格・免許」という観点に分け、グループが、自分の担当する観点についてのメリットを考える活動に入っていく。「資格・免許」について考えたグループでは、Aさんが、「他国でも自由に働ける」という意見を出すと、それに対し、Bさんが、「それが失業率の減少につながる。」と補足する。それを聞いたAさんが、「それって本当かな？」と疑問を投げかける。そこに授業者の先生が、「なぜ減少するの？」と質問すると、生徒たちは、「仕事に就きやすいから」と答え、一応の意見の一致をみる。その後、その他のメリットがいくつも挙がっていく。

次に、それを黒板にマッピングする活動に入る。それぞれの班が、観点ごとにメリットとその理由を説明し、授業者の先生が補足しながら黒板の短冊を整理していく。そして、「資格・免許」について調べたグループの発表になると、「他国でも自由に働ける」「失業率が減少する」「教育水準が上がる」といった意見を発表する。それに対して、別の班のCさんが、「『自由に働ける』っていうのと『失業率が下がる』っていうのは関係ないんじゃない？」と疑問を投げかける。それにBさん

が、「色々な国で仕事に就けるから仕事に就きやすい。」と説明する。すると、さらにCさんが、「A国へB国から労働者が入ってくると、A国の人の失業率が上がるのでは？」と意見する。ここでは結論が出ず、次回の課題とするということで議論が終わる。

こうしてメリットをマッピングしていくと、メリットだとはっきり分かるものと、本当にメリットと言えるのか分からないもの（デメリットも内包しているもの）が混在していることに生徒たちは気づいていく。

ここで、授業者の先生が、「エストニアEU 加入喜びと戸惑い」「EU連帯 歩調に乱れ」「英に広がる脱EU」といった新聞記事を紹介し、「本当に良いことばかりなの？」と問いかけ、自分たちがまとめたシートを重ねてみるよう伝える。Aさんたちのグループでは、失業率・国民所得・最低賃金などのシートを比べ、最高と最低の国で大きな差があること、色を塗った国が西側によって大きな差があることに気づいていった。

この授業を参観していて感じたのは、コミュニティの学びが、生徒個人個人の学びにおいて意味のあるもの、必要なものになっているということだ。前時までに自分が学んだことや課題として調べてきた資料から考えた自分なりの意見を、同じ観点を調べたコミュニティで交換・共有する。それをコミュニティとしての結論にまとめ、学級全体に伝える。すると今度は、それを聞いた別

のコミュニティからの疑問や反論があり、自分たちの結論をもう一度吟味する必要性が生まれ、その中で新たな学習課題が浮かび上がってくる。このような学習の流れの中で、生徒一人一人の様々な見方・考え方は、深められ、淘汰されながら、しっかりとした社会認識となっていく。まさに、コミュニティでの学びによって「学びの繰り上がり」が生まれる授業展開であった。

普段、私が授業を展開していく中で課題となるの

が、グループ学習やペア学習での学びをいかに全体で共有し、深めていくかという点である。そうした課題を抱えていた私にとって、今回の研究授業は、非常に示唆に富むものであった。

最後に、この研究集会にたずさわっておられた方々に感謝を申し上げたい。すばらしい研究集会を開催していただき、ありがとうございました。

## 福井県教育研究所（教職大学院平成23年度修了生）

### 富澤 宏二

2010年に教職大学院に入ったのが縁で、附属中学校の研究集会に参加するようになって、これで5回目でした。昨年は授業と分科会のみでしたが、今年はなんとか仕事もやりくりでき、最後のシンポジウムまでお聞きすることができました。

5年前は、何を隠そう全体会で言われていることがさっぱりわかりませんでした。しかし、5年を経てやっと附属中学校の意図するところがなんとなく分かって来たつもりです。特に全体会で説明されていた「探究するコミュニティにおいては良き聞き手となることが必要」ということは、現在の職場でも感じていることであり、共感して聞くことができました。

また、同校が「子どもに自分の学びの繰り上がりをフィードバックする」ことを目指していると表明していたことが重要だと思います。歴史をひもとく余裕はありませんが、「はいまわる経験主義」と誤解されないためにも、学習の深化あるいは高度化が求められています。これは、教科ごとの分科会でも、子どもたちの意見を「いかに絡ませるか」という言葉で議論されていましたが、まさにそのことだと思いました。今回公開された二つの授業においても、子どもたちの学びを授業の中でどう絡ませつつ、深めて行くのが分科会での議論のポイントとなっていました。もちろん事前の準備は周到になされるべきです（事実なされていましたが）、その予定を守ることも、子どもたちに自分たちが参加している感覚を持たせるためには、あえて計画を外れ、その場でのコミュニケーションを深めてあげることが大事だということが改めて認識されました。そのためには子どもたちの意見に柔軟に対応しつつ、彼らをどこに持って行くのかという教員の深い洞察力と判断力が求められます。

シンポジウムで高木展朗先生が、「授業は『聞く』と待つ』が大事。相手の話をきちんと聞いて（見取って）、それを単に復唱するのではなく、相手との対等な関わりの中で返していかなければならない」とおっしゃり、秋

田喜代美先生が「先生が『聞く』のモデルを示さなくてはならない。年々附属中の先生の声が大きくなっていることが心配である。『何々が大事』と型で語ることには不安がある。型で縛ると苦しくなる」とおっしゃっていたことと同じ課題だと感じました。

また、子どもたちはそれぞれの授業で「どう思うか」「どこが面白いのか」は多く語っていたのですが、「なぜそう思うのか」「なぜ面白いのか」には未だ至っていないという見取りもありました。これは厳しくも重要なことだと感じます。話し合いの授業はどうしても拡散的、オープンエンドになりがちですが、それをいかに焦点化するかというのは難しいことです。話が拡散してしまうのは、他人の話が聞けていないからであり、「聞いて、つなげて話す」ということを大事にしなくてはならないと改めて実感しました。

その他、シンポジウムの冒頭、「協働の学びはなぜ必要なのか。達人と言われる教員が50分一方的に講義をしたならば、生徒がそれで好奇心を起し、自律的に学んでいくことは可能ではないか」と刺激的な議論をはじめた荒瀬克己先生の言葉には、相変わらずのオーラを感じました。その後、森田先生の巧みなコーディネートで、3人の先生それぞれの議論が火花を散らす様子は、まさになるほどと思えることばかりで、大変勉強になりました。

その点、毎年公開授業をなさる附属中の先生が大変なプレッシャーの中、生徒の学びを見取りつつ臨機応変に授業をコントロールしようとおられるのは、とても頭の下がる思いです。私も職場は初任の先生方を始めとする多くの先生方の研究実践を支援する立場なので、今回学んだことを丁寧に伝えていかなければならないと改めて思いました。附属中学校の先生方、本当にありがとうございました。

## スクールリーダー養成コース2年／藤島高等学校

野尻 友佳子

多くの付属中学出身の生徒が我が藤島高校を選んで入学してきます。その生徒たちがどのように学び、どのような力を育んできたのか知っておきたい、まずはそのことを第一の目的として研究集会に参加しました。

いろいろな教科における生徒たちの様子を知りたい思いもありましたが、今回は2時間とも国語の授業に参加することにしました。3年生の小説『握手』の授業では、「まもなく一周忌である。」という一文は何を表したかったのか、生徒たちが読み取った考えを発表する場面に引きつけられました。2年生の授業では、クラスのある生徒が作った「部内戦試合の前の緊張にコロコロ笑う台上のボール」という短歌を鑑賞し、最後の作者本人の作歌に込めた思いの発表には、思わず拍手を送ってしまうほどでした。

午後から行われた教科別分科会（国語）には、福井大学の学生も含め40名ほどが参加しました。司会の先生の絶妙な進め方のおかげで、次から次へと意見が飛び交い、80分間があつという間でした。仲間の発表を聞く際に「よし！聞こう」と思わせる仕掛けの工夫を。生徒の興味が離れていくのを感じたら恐れず軌道修正を。拡散的になった意見を焦点化していくため

には。これらを始め、明日の授業から考えていきたい観点が満載でした。お二人の先生方がご苦勞なさって授業を公開してくださったおかげで、多くのことを考えることができました。感謝申し上げます。

一日の最終プログラムである「シンポジウム（子どもたちが学びを実感できる協働学習を構築するために）」は、秋田喜代美先生、高木展郎先生、荒瀬克己先生が一堂に会し、議論が展開されるという夢のような80分でした。森田研究主任のスマートなコーディネーターがまたすばらしく、深い思考を楽しむことができました。

「協働学習」というものを、従来の授業スタイルとの二項対立で考えたり、その形式だけ取り入れたりするのではなく、協働の学びを生かして学力もつけていく効果的なものにするために、常にその必然性と意義、問題点を考察し続けたい、と思いを新たにしました。また、生徒たちに「聞く」力をつけるために、具体的に取り組んでみたいと考えています。そして、まずは「教師の協働」から。互いに尊敬と信頼の思いで、学べることを見つけていきたい、そういった学校文化を育みたい、と意欲を新たにさせられたシンポジウムでした。

## 教職専門性開発コース2年／中藤小学校

天谷 美怜

第49回附属中学校教育研究集会に参加させていただきました。昨年度は、教職大学院に入って初の中学校訪問にわくわくしながら附属中学校に向かっていたことを思い出しました。小学校へインターシップに行かせていただいている私にとって、中学校の研究会は自分の専門教科（保健体育）を再認識する貴重な機会となっています。今回は初めて参観した保健（1年A組）について書いていきたいと思えます。

まず、附属中学校では学校保健が各教科と並んでおり、養護教諭の方が保健の授業をされている（全単元なのか、いくつかの単元なのかは分かりません）ということに驚きました。学校保健の核となる学びを「心や体をみつめ健康生活づくりにつなげる」と設定し、保健室での生徒への対応、学校全体の保健指導や個別指導に加えて、保健学習に取り組んでいるようです。私は保健体育という教科の中で

体育教師が保健の授業をすることが当たり前だと思っていたので最初は不思議でたまらなかったのですが、考えてみると、全校生徒の健康状況を把握している養護教諭の方が保健の授業をすることはとても自然なことに思えてきました。気になって附属中学校の研究紀要をさかのぼってみると、平成13年の紀要に「養護教諭が兼職発令を受けて、保健教育を担当している」と書かれ、養護教諭による保健学習の取り組み（全単元ではなく、いくつかの単元）が始まっていました。それ以前の紀要でも学校保健の取り組みが書かれており、当時の養護教諭の方がその専門性を生かしたカリキュラムづくりに尽力されていたことが分かりました。附属中学校の先生方が協働して研究に取り組む姿勢から、このような形が生まれてきたのだろうと感じました。

参観させていただいた授業の単元名は「わたしのストレス処方箋をつくらう！欲求不満やストレスへ

の対処」で、日々保健室で生徒と関わっている養護教諭の先生が、生徒の実態をふまえて単元を構成されていました。事例から見えるストレスラーに対するストレス処方箋を班ごとに作成してあり、今回の授業では他の班の処方箋から自分の班の処方箋に新しい意見を取り入れ、最後に各自が自分にあったストレス対処法を考えていきました。私の見ていた班の子どもたちは他の班の処方箋から新しい意見を取り入れるというよりも、自分たちの処方箋の根拠をより明確にするための情報を取り入れたり、他の班の生徒に質問されたことから自分たちの処方箋を見直し内容を補足したりしていました。また各班から出てきた処方箋とその根拠を踏まえて自分の生活を振り返り、自分に合った「わたしの処方箋」を作り上げていました。分科会では、先生が構想されていた「学びの繰り上がり」とは別の場面で生まれてい

た「学びの繰り上がり」が見えてきて、入学して2か月の1年生の中に「コミュニティ」が形成されてきていることを感じました。

昨年はまだ「授業者の先生がつくった授業」だけしか見えていませんでしたが、この1年間附属中学校の先生方やインターン生から研究にかける思いを聞いていたことで、「附属中学校の先生方が協働してつくってきた授業」として見えてきたように思います。分科会では、授業者である養護教諭の先生が「教科を超えて構成された部会でたくさんの意見をいただいて、先生方に支えられて授業をつくってきた」ということを何度もおっしゃっていました。協働探求学習を生み出すために先生方が協働で取り組んでいる附属中学校の研究集会から、多くのことを学ばせていただきました。ありがとうございました。

## インターンシップ／週間カンファレンス報告

### 教職専門性開発コース2年／中藤小学校

西川 文野

教職大学院のニューズレターの中にインターンシップ・週間カンファレンスのレポートを書くという新たな試みも、今回で2回目である。前回（教職大学院 Newsletter No. 63）の天谷院生、鈴木院生のインターンシップ・週間カンファレンスのレポートは、週間カンファレンスについて、詳しく述べられていたため、今回はインターンシップを中心に述べていきたいと思う。

教職大学院のストレートマスターは、カリキュラムとして、それぞれ拠点校といわれる福井県内の小中学校、特別支援学校にて、1年目は長期インターンシップを、2年目は課題別実習を行っている。

私は、中藤小学校でインターンシップをさせていただいている。その中で、自分の目指す教師像とは何かについて、日々考えながら児童と関わっている。

1日の活動内容は、一学級に入らせていただき、授業、休み時間、給食、掃除の学校生活すべての時間において、子どもたちと過ごす。また、単元を通じた授業実践などさせていただくこともある。昨年度は特別支援学級で生活単元学習「ずんだもちをつくろう」、後期は、1年生の学級で国語科「これは、なんでしょう」の2つの単元で授業実践をさせていただいた。そのほかに

も、同じ学年の先生方の授業を参観させていただくこともある。中藤小学校は大規模校であるので、多くの先生方の授業を参観させていただく機会があり、現場を知る上で、大変有意義な時間を過ごさせてもらっていると感ずる。

また、放課後は、先生方とともに、職員会議や、全体研究会、各部会、学年会にも参加させてもらっている。

インターンシップでは、教育実習生とは違い、このように職員会議や全体研究会、指導主事訪問の研究会等にも積極的に参加することができる。また、その中で記録・写真を任されることや、グループセッションの中で発言する機会が与えられている。教育実習のときよりも、より教職員に近い形で、学校生活に関わることができるようになっていたり、教職員の一人として役割を任されているため、責任感のある仕事が多い。そのため、自分から率先して動くことや自分から、積極的に先生方と関係を築くことが必要であると感ずた。また、昨年までは、先輩方がいらっしゃったことで、自分に疑問点や分からないことがあると、すでにこなしてこられた先輩方に相談することができた。しかし、2年目になり、先輩方も卒業され、新しい後輩も入ってきた。その

ため、逆に頼られる存在になり、ますます自分から積極的に動き、先生方に質問し、関係を築いていく事が重要視されるようになったと感じる。

また、インターンシップでは、1日中子どもたちと過ごす貴重な時間の様子を、1時間目から5時間目までの授業に沿って、子どもたちとの関わり、また子ども同士の関わり、会話などを記録に残している。記録に残すことによって、その時には分からなかったことがしばらく時間をおいて改めて読むことで、そのときの児童の行動や自分の興味・関心は何かなどが客観的に見えてくることもある。つまり、記録を常に取り続けていく事で、自分自身の学びの変遷が分かる。そのため、事実を坦々と書くのではなく、そのときの思いなども書くことで、そのときの様子をじっくり想起することができるのではないかと考える。1年間で、300ページ以上にもなる膨大な記録は、私にとっての財産である。

そして、今年の3月には大学のカリキュラムとして、1年間のインターンシップの記録をまとめる時間が設けられていた。その中で、昨年度4月から3月まで書いてきた記録を改めて読み直すことができた。そこでは、自分の目指

す教師像、自分の中のテーマとは何かについて少しずつ明らかになってきたように思うもの、自分の中で確固たる答えを出すことはできなかった。しかし、自分の中で曖昧な思いを形にしてくれるのが、カンファレンスである。カンファレンスでは、校種を超えた、様々な視点をもった人が集まり、一人だけでは考え出せない角度から意見をもらうことができるのである。そこで、自分一人では分からなかった発見をすることができる。

この教職大学院の構造をいかし、自分のテーマに答えを見つけることができればと思っている。修了する際には、長期実践研究という大きな壁がたちはだかっているが、膨大な記録を何度も読み返し、客観的に捉え直すことで、私は何を学んできたのか、どういう理由からこの視点で記録を書くに至ったのか、など振り返っていくことができればと考えている。はたして、この2年間の中で見つけることができるのか、とても不安ではあるが、精一杯頑張っていきたい。

## 教職専門性開発コース2年／美浜中学校

### 池田 郁

2014年度がスタートし、もう3ヶ月が経つ。泣いても笑っても学生でいられる最後の一年。今年度の目標は一日たりとも無駄にしないこと。それは子どもたちと一日を共に過ごすインターンシップにも当てはまる。

私は今年度も、美浜中学校でインターンシップをさせていただいている。しかしインターン2年目の一学期の間は中学校に行く頻度は週に一度だけで子どもたちと関わる時間はとても少なくなった。そして昨年度共に学び、切磋琢磨してきた子どもたちは3月に卒業し、新たな学年の子供たちと関係を築くことから始まった。

インターンシップ1年目は私の場合、週に3回美浜中学校で教師の総体を学んできた。朝学習の始まる前に学年エリアに入り、子どもたちと朝のあいさつをすることから一日がスタートし、部活が終わるまで子どもたちと共に過ごした。インターン生として学校で過ごす中で子どもたちとぶつかることも多々あった。子どもたちとの関わりに迷ったり困ったりした時もあった。しかし、それ以上に子どもたちと一緒にになってがむしゃらにがんばった一年で、私は多くのことを学ぶことができた。

たくさんのことを経験し、悩んできた一年で、私は自分の目指す教師の姿を見つけた。私はとにかく子どもたちと一緒に過ごしている時間が大好きで、自分から子

どもたちに近付いていき、ありのままの私の姿を見せている。そうしていく内に、男子も女子も自分から関わりを求めてやってきてくれるようになった。関わり方は人それぞれである。恋の相談をしてくる生徒、友達との関係に悩みやってくる生徒、勉強がわからず教えてほしいとやってくる生徒、とにかくちょっかいをかけて私の反応を面白いがる生徒、部活で技術指導を求めてくる生徒。子どもたちといろいろな関わり方をした一年間であった。はじめは聞くことだけしかできなかったが、彼らの行動の背景や思いを考えるようになり、自分自身の子どもたちに対する対応の内容や方法が変わっていった。話を聞くだけでなく、自分の思いや自分の経験もたくさん話すようになった。私が子どもたちにオープンになることで彼らは信用してくれることに気付いたのである。それまでは威厳があって指導がずっと通るような先生になるべきだと思っていたのだが、一年間学校で子どもたちと関わっていく中で、自分に合った、自分にしかできないやり方を通して子どもたちに伝えたいことを伝えていけたらいいと考えるようになった。

このほかにも授業実践を通して、全員が取り組みたいと思える課題や、学ぶことが楽しいと思える授業とはどのようなものか真剣に考えたり、教材研究に全力を注い

だりもした。大学を卒業しすぐ働くという手もあったのだが、長期にわたって実際の現場で教師を目指すインターンシップの制度はとても有意義なものであると思う。インターン生として一人ひとりの子どもたちとじっくり関わる時間が確保され、授業をすとなれば一単元を何日も何週間もかけて教材研究ができ、子どもとの関わりや授業づくりに大いに悩むことが許されている。私の場合は自分のちっぽけな悩みも職員室で相談することができたし、また先生方との他愛もない話の中で先生方の教育に対する思いを聞くこともできた。学校に行き子どもたちと関わることも楽しみではあったが、私は職員室に行って現場の先生方と話をする時間もとても好きであった。何もわからない私を教員の一人として温かく迎えてくれる先生方から直々に様々なことを教わることができた。校務分掌の仕事も受け持つ授業クラスもないインターン生は、自分の取り組みたいことに全力を注げる時間がある。悩んだ時に助けてくれる先輩先生がたくさ

んいる中で、教師を目指して日々挑戦することのできるこのインターンシップでの経験は、実際に教員になって活かすことができるものがたくさんあると思う。木曜になればインターン生同士が集まって話を聞いてもらうこともできる。同じ立場のインターン生に話を聞いてもらって解決した悩みは昨年度たくさんあった。聞いてもらうだけですつとすることもあった。私は一年間のインターンシップを通して自分の目指す教師の姿を発見し、また子どもとの関わり方が一年前の今と比べて大きく変化した。とっても有意義な一年を送ることができた。

そして、2年目が始まった。今年もきっとまたなんらかの壁にぶち当たって悩むことがあるだろうが、思いっきり悩んで自分なりの答えを見つけていきたい。最後の一年間、一日一日を大切にがんばっていきたい。

## 教職専門性開発コース1年／啓新高等学校

藤井 真衣

毎週木曜日に大学院で行われる週間カンファレンスは、私たちストレートマスターにとってとても貴重な時間です。中でも自分たちで企画運営する「主担当企画」は、「2年間のインターンシップをどう過ごしたらいいのだろうか」「現場で何を自分の柱にしたらいいだろうか」「自分はどんな先生になりたいのだろうか」といった院生共通の悩みに迫ることができます。主担当企画の運営と4月の企画「Re:START」(リスタートダッシュ)」については前号の天谷先輩と鈴木先輩が詳しく紹介してくださったので、ここでは5月と6月の主担当企画について書きたいと思います。

5月の主担当企画のテーマは「“記録”に書くこと、“記録”に残すこと」でした。私たちはインターンシップでの経験を毎回記録にして残しています。聞こえは簡単なのですが、実際に書いて見るととても難しいのです。思いの外膨大な時間を必要とし、書いている内容も本当に学びとなっているのか自信が持てない。有意義な学びになっていると実感できない記録に、こんなに時間をかけていいのだろうか。パソコンに向かうとき、いつもそんな焦りがありました。

そんなときに5月の主担当企画が始まったことは私にとってとてもありがたいものでした。5月の主担当企画を通して最も大きな感動は、授業参観の視点を学べたことです。5月第3木曜日に附属小学校で授業参観をさ

せていただき、そこで書いた記録を第4週で見せ合い考察したのですが、同じ授業を院生・先生方全員で見ることによって様々な視点の在り方や生徒の行動から学びを見取るための考察の方法を具体的に知ることができました。例えば宮下先生は、話し合い活動で聞き手の子どもが「うん。」と相槌を打ったことで、話し手の話が引き出されたのだと話して下さいました。これを聞いてただの「うん。」が実は相手の意見を受容するサインだったと改めて気付くことができました。また2年生の加藤先輩と牧田先輩は、授業中に話し合いのメンバーを代えることが子どもたちに色々な役割を体験させる役割を担うという意見を出されましたが、これも聞かなければ流してしまっていたことです。当たり前のことなのかも知れませんが、子どもたちの行動から学びとしての役割を見出すとはこういうことを言うのかと目から鱗が落ちたような感覚でした。

5月の主担当企画を終えて、生徒の行動の羅列だった私の記録は少しずつ変化してきました。生徒の学びを見取るにはまだ程遠いのですが、まずはインターンでの観察視点から試行錯誤していこうと考えています。

6月の主担当企画のテーマは「Process to the Next Stage」です。啓新高校インターン生の船木先輩、宮川先輩、田村君、私の4人で企画することになりました。週間カンファレンスの軸である「話し合い」を見直すの

が6月の目標となっています。ここからは6月の主担当企画を決めるまでの過程と、第1回目を終えた感想を書いてみたいと思います。

週間カンファレンスはその多くが話し合い活動です。言葉にして表現しあうことによって学びを深めることがねらいからです。しかし2か月間話し合い活動を行ってきた、議論ができたかどうか、学びが深まったかどうか確信が持てませんでした。なぜなら週間カンファレンスの場が語りと傾聴の場にはなっているものの、各々の言いたいことが言い合えていないような気がしたからです。何とかこの空気を打破して、週間カンファレンスをもう一段上の学びの場にできないだろうか。話し合いをもっと意義深いものに変えられないだろうか。啓新インターン生の4人のこのような思いで6月の主担当企画が始動しました。

6月主担当企画第1週目の活動では、週間カンファレンスの現状や課題を話し合いました。話し合いをしていくにつれて、グループのメンバーの本音が少しずつ言葉となって表れてきました。「自分の話に自信が持てない」「聞いてくれているか分からないと不安になる」「テーマが見えない」「専門の先生からのアドバイスが欲しい」「自分だったらどうするか考えながら他の人の

経験を聞くととても充実感がある」「もっと上手くファシリテートしたい」本音を言い合ってそれに共感しあうことで、メンバーの顔が明るくなっていくのを感じました。私自身も「もっと皆の考えに迫りたい、課題の本質に迫りたい」と強く思いました。また各グループの意見を全体に発表する場面では、共通する意見であっても別の言葉が使われていることや、別の視点で週間カンファレンスを捉えていることが明らかになりました。

第1週目の活動を通して二つの変化を感じました。「週間カンファレンスをもっとよくしたい」という空気が全体に生まれたことと、発表を明るい顔で聞きながら聞く人が増えたことです。この変化を糧にして、第1週で出た課題の解決策を考える第2週、教育の議論をして解決策が機能しているか考える第3週第4週を経て、互いを受容しあい認め合いながら一段上の学びを求める週間カンファレンスになるよう、啓新インターン生は「可能性への挑戦」を続けています。

平成26年度

## 第1回運営協議会が開催されました



教職大学院 教授 二宮 秀夫

5月14日（水）に福井大学文京キャンパスにおいて、平成26年度第1回運営協議会が開催されました。はじめに中田隆二・教育学研究科長、次に三田村彰・福井県教育庁企画幹の挨拶の後、全体協議会及びグループ別協議を行いました。

前半の全体協議会では、次の内容が協議され、原案通り承認されました。

- ①福井大学教職大学院の運営（案）及び26年度年間計画（案）について
- ②平成27年度学生募集スケジュール（案）について
- ③拠点校・連携校担当教員について
- ④平成26年度教員免許状更新講習（必修領域）について
- ⑤その他（広報誌の発行、6月ラウンドテーブルについて）

後半のグループ協議では、県教育委員会、市町教育委員会、拠点校、連携校（2グループ）の5つのグループに分かれ、これまでの成果や課題、要望などについて活発な意見交換ができました。

**【県教委】**

教職大学院の直面する次のような課題について論議がなされ、建設的な意見交換ができました。改善の難しい課題もありますが、県教委と大学との連携の重要性を確認し合えたのではないかと思います。特に、拠点校の拡大や教職大学院の取り組みの啓発については、成果をどうアピールするかという点で、第三者委員会（県、市町教委、大学、民間）をつくる、連携校での成果を見える形にし、周りから「あれならうちでも引き受けたい」と広げていく、高校の場合は連携校にもインターンの受け入れをお願いする、インターンシップと非常勤を組み合わせるなど多くの意見が出されました。

- ・教員採用試験に係る大学院特別選考の不確実性の問題（大学院に行く“可能性がある”という状態での出願のため、大学院へ行かないかもしれないなど）
- ・経済的支援（スカラシップ）
- ・5年くらい講師をしてから教員に採用されるというサイクルをどう乗り越えるか
- ・拠点校や教職大学院に関する理解の徹底
- ・教職大学院と連携した若手教員の研修

**【市町教委】**

各市町教委から現状と課題、大学への要望が出されました。成果については、スクールリーダー個人や校内研究体制などの成果の実感だけでなく、子どもたちや市全体へ成果をどう広げるかなどの協議もなされました。

その後全体では、教職大学院の紹介しやすい場があれば呼んでほしい、各拠点校を担当している教職大学院のスタッフをいろいろな場で生かしてほしい、など教職大学院側からの要望も伝え、意見交換を行いました。

**【拠点校】**

各拠点校からは、インターンの院生に影響されて他教員の学ぶ意識が高まっている、大学のスタッフが院生に対してのみ助言を行うのではなく周りの教員の変化にも声をかけ助言を行ってこれ教員の励みになる、スクールリーダーやストレートマスターそれぞれが研究テーマを持って学校の大きな戦力となっている、問題傾向をもつ生徒と積極的に関わってくれているなど、院生の活躍の様子や成果についての報告がありました。また課題としては、がんばっている院生への経済支援や教職大学院で学ぶことのインセンティブの問題、教職に対して消極的な院生がいる場合の対応、スクールリーダーの負担減のことなども取り上げられ全体で協議しました。

**【連携校】**

小中学校のグループでは、多忙の中にあっても研究の要として取り組んでいる2年目の院生や、1年目として前向きで意欲的な様子など活動状況の報告や今後、院生に期待することについて報告がありました。スクールリーダーの成果を具体的に紹介していただいた学校もありました。また、教職大学院と学部の動きが二重になっていて学校現場が振り回されないよう、学部と教職大学院が連携して動いてほしいなどの要望も聴くことができました。

高等学校のグループでは、授業改善が学校全体の広がりになっていないなど課題のある学校の現状や、授業研究週間を利用し授業を公開し合っている、院生の働きで研究がトップダウンからボトムアップで行われる環境ができつつあり若手とベテランが教科をまたいで生徒をみる視点で何回も研究会を行っているなど改善が進む学校の状況についての報告、更には、新しく英語科を中心とする小中連携の取り組みを始める学校の報告等がありました。また、静岡県富士市立高校では、以前の市民のための学校というスタイルから総合型専門校高校へ再編となり、改革がトップダウンで行われたので、意識作りが大変だったこと、システムも大切だが信頼関係が基本であるという旨の話も聴くことができました。教職大学院としても、そのような視点での連携の大切さを確認することができました。

これら運営協議会の各グループでの協議内容は、教職大学院スタッフで再度分析・検討を行い、関係学校、教育委員会との連携を深め、今後の教職大学院運営や状況改善に生かしていきたいと思えます。

# Staff 紹介



## 西川 満

Mitsuru Nishikawa

今年度、大学院教育学研究科客員教授として着任しました。二ヶ月が過ぎ、教職大学院のすばらしい教育実践に日々驚いています。ここで学ぶものにとって、長期インターンシップやカンファレンス、集中講座、ラウンドテーブル、実践研究報告執筆等々、どれもこれも大変魅力的な充実したカリキュラムです。毎週火曜日のFDでは、全てのスタッフが長期実践報告や各校の研究紀要、教師教育改革資料等を読み、とことん語り合います。私の場合、まだ、読んでまとめるのに何日もかかり苦労していますが、ここで学ぶ院生の方々はもちろん、自分自身が1年後にはどのように変容しているのか、大変楽しみな毎日です。

最後の終業式の講話の中で生徒に次のように語りかけました。自己紹介を兼ねて振り返ります。

私は、38年間教育という仕事に携わってきました。この3月で定年退職します。今日は、まず、初めて教員になった頃のエピソードを3つお話ししたいと思います。

私は、22歳で教員に採用されました。新聞の記事である中学校に採用されたことを知りました。その中学校はどこにあるのだろうと福井県の地図を広げて探したことを覚えています。いきなり3年生の担任になり張り切って授業をしましたが、初めての中間テストで隣のクラスの先生より平均点が10点近くも悪く、ひどくショックを受け落ち込みました。どうしたらよいのかと考え悩みました。そして、思い切ってクラスの生徒に状況を説明し、生徒からの授業評価を、感想や要望を書いてもらうことにしました。生徒はとても親切で親身になって新米の教師を教え、励ましてくれたと思います。教育は「教え、教えられる」ものだと知りました。

2年目は1年生の担任になりました。1年目の経験を生かして、計画的に懸命に学級づくり、授業づくりに励みました。そして、この調子で3年生まで持ち上がり卒業させるぞと意気込んでいました。3学期の終業式のあとお楽しみ会を開き、来年も頑張ろうねと話していたところ「ちょっと校長室へ来てください」と呼び出しを受け、「小学校へ転勤です」といわれました。本当にびっくりしました。お楽しみ会が涙のお別れ会になってしまいました。そのとき以来、来年もあるぞとは考えずに、クラスは1年ごとで「一日一日を、今日のこの授業

を真剣に取り組む」いつ別れがあってもいいという気持ちで生徒に向かい合うようにしてきました。その後職場を8回変わり、この高校が九つ目です。たくさんの生徒と出会えてとても幸せだったと思っています。

3年目は小学校で5年生の担任になりました。専門の数学ではなく、国語、算数、社会、理科、体育を、そして道徳を教えることになりました。どれもこれも初めての内容ばかりで、いろいろな本を読んだり、先輩の先生方に教えてもらったりして四苦八苦しながら取り組みました。どちらかというと、体育主任として体育的行事や各種大会への練習に明け暮れていたと思います。ある日の授業で「人の言うことは聞きましよう、人のいやがることをしてはいけません」と述べました。すると、ある子が手をさっと挙げ「先生からたばこのにおいがするのがいやです。タバコをやめてください」と発言しました。そのときになんと言いつuroったかは忘れましたが、その日から頑張ってきたとタバコを吸うことをやめました。「生徒から学ぶ」ことの繰り返しだったと思います。

この教員としての出だしの3年間で、教師とはどうあるべきか、教師としてどうやっていったらよいのかを学んだと思います。そのことを大切にせずと実践してきたつもりです。38年間に、いろいろな学校に行って、いろいろな生徒と出会い、いろいろな役目をもらいながら、一生懸命、一心不乱で、教育という仕事に取り組んできたなあと思っています。

さて、昔話はこれくらいにして、最後に1冊の本を紹介したいと思います。私が今日皆さんにお願いしたいことをうまく述べている、すばらしい本を見つけました。「置かれた場所で咲きなさい」(幻冬舎)という、ノートルダム清心学園理事長の渡辺和子さんが書いた本です。本の中身は紹介しないので、ぜひ手に入れてゆっくりと繰り返し味わって読んでみてください。ここでは、本の帯に書かれている言葉を読んで紹介したいと思います。とてもやさしいおっしゃりかたです。

「時間の使い方は、そのまま、いのちの使い方なのです。置かれたところで咲いてください、…」

「置かれた場所で、咲きなさい」いい言葉だと思います。私は、これからも、置かれた場所で、新しい場所で、自分なりの花を、努力して、咲かせたいと思っています。皆さんも、置かれた場所で、ぜひ、それぞれのすばらしい花を咲かせてください。楽しみにしています。



## 小嵐 恵子

Keiko Koarashi

平成25年度より、教職大学院の客員教授として着任しました小嵐恵子です。関係の皆様、どうぞよろしくお願いたします。

約40年ほど前に、私はこの福井大学に籍を置いていました。現在カンファレンスを行っている場で、白衣を身にまとい人間やネズミの脳波の実験に明け暮れていました。そうまさに実験とそのデータ処理に追われ、教師となるための知識や経験を得ることに興味がありませんでした。教師となるための単位は修得したものの、先輩諸氏から学ぶ実験やその分析の方が、はるかに楽しかったのです。そうした実験が教師生活になにも役立たない。そもそも大学で学んだことが将来の教師生活に役立つとは思っていませんでした。あるとき、指導教官に質問したことがあります。「こんな勉強は役に立つのでしょうか？」教官はこう応えてくれました。「大学で知識を学ぶのではない。学び方を学んだ。」それが何を意味するものなのかは、当時の私には良くわかりませんでした。必要なことは、教官からではなく、先輩諸氏や同期生から学びました。実験の方法やデータ処理の仕方、論文の書き方ですべて手伝いという形で吸収することができました。

そんな私が教師となり、定年まで終えることができた今、自分に問うことは「学び方を学んだ私は、その後学び続ける教師であり続けることができたか。」ということです。

私の教師生活は、福井南養護学校、福井大学附属養護学校、福井東養護学校を経て、行政職や管理職へと進みました。大学生からいきなり教師になり授業をする身となり、戸惑うことがありましたが、自他共に認める初任者である私は、同僚や先輩の先生が他の授業を真似ながらの出発でした。当時は初任者研修なんてものはありませんでしたから、必要な知識は書籍を購入して読み漁りました。必要だと思うことは、人から教えてもらうのではなく、『見ればいい、聞けばいい、読めばいい』と思っていました。

その後、『話せばいい』が加わったのは、附属養護学校のときでした。当時は、摩訶不思議な子供たちとのかかわりで苦悩していました。いわゆる自閉症の子供たちです。彼らは教師の指示に従うことができない状況でした。この状況を、指示に従わないのか、指示に従えないのかという疑問がありました。同僚との話し合いの末、彼らが指示に従えない、私たちの意図が理解できないという立場に、私は立つことができました。教師が子供に何かを教え込もうとしたり何かを従わせるのではな

く、彼らを理解することから始める。どのように理解するのか、どう理解したのかを話すことの重要性を認識するようになりました。子供のことは、そして彼らとのかかわりについては、同僚と『話せばいい』と思うようになりました。

福井東養護学校に転勤した後に、もうひとつ加わりました。『書けばいい』ということです。それまでも書く機会はありませんでした。研究授業・研究紀要等で書いていたのですが、それは書かされていたのであって、『書くといい』などとは思っていませんでした。しかし、子供たちとのかかわりの経過をその都度書いてみると、子供をどう理解していたのか、どう変容したのか、そして自分がどう変わったのかを知ることができるんだと思えるようになりました。私にとっては書くことは自分と子供の成長の記録であり、それを表現することは楽しいことでした。同僚の書きためた記録を読むこともまた同様であり、書くことと読むことは一体となって喜びをもたらしました。当時は「楽しくなければ授業じゃない」を合言葉に、子供とのかかわりを話し、聞き、そして書き、読むことに明け暮れました。

私の教師生活は、『見ればいい、聞けばいい、読めばいい、話せばいい、書けばいい』といったことを体得した日々であろうと思います。そのことが学び続ける教師の一端を体現したものでであろうとは思いますが、このことだけで教師生活を語るには不十分だとも思っています。教職大学院に身を置く今、教師としてというより人として学び続けるということはどういうことなのか、どうあればいいのかについて、皆さんとともに追求していきたいと思っています。

ようやくノルマの2000字を目前にして、ホッとしていると共に、これから関係の皆様とどのような関係性を営めるのか、ワクワク、ドキドキしています。どうぞよろしくお願致します。



## 院 生 紹 介



### 柘植 泰子 つげ ひろこ (足羽中学校)

今年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました柘植泰子です。現在、福井市足羽中学校に勤務して3年目になります。

私は、鯖江市東陽中学校で新採用となり、2年勤務し、その後、福井大学附属中学校に9年間お世話になりました。採用して3年めで、教職の仕事がやっとわかってきただけで「研究」については微塵も理解できなかった頃の附属中での勤務は、毎日が知らない言葉との遭遇でした。そんな状況の中で、「探究・創造・表現する総合的な学習」の発刊。同僚の先生方の実践記録はどれも素晴らしく、こどもの様子を描きながら、子どもたちの学びのプロセスを分析されていました。そんなレベルに到底到達できない私は、子どもたちの立場になって、その学びの様子を書くことしかできませんでした。そんな私の文章を、その時の部会に入ってくださいっていた森透先生は「読みやすくいいよ」とおっしゃってください、それをほめ言葉と受け取り、励みにして書ききったのでした。

附属中での勤務の後半は、研究主題が「探究するコミュニティ」となり、部会による授業研究が盛んになり、子どもたちの学びを見取って語る授業研究会のスタイルが定着した頃になります。研究主題や、「探究とコ

ミュニケーション」「協働」「プロセス評価」など、一つ一つの言葉について熱く議論が交わされ、皆でそれぞれの意味やそれに寄せる願いなどを共通理解しながら進められていく研究は、とても心地よく感じられました。

そんな9年間を過ごして足羽第一中学校に5年勤務し、現在の足羽中学校に至っていますが、公立の中学校に出て感じたのはやはり、研究への抵抗感を持つ先生方の多さと、授業研究会のあり方への疑問でした。日々の校務や生徒指導に追われ、授業研究になかなかたどり着けない毎日。授業を公開すると、授業者が見取られ、机を大きくコの字型に並べたところで「まな板の上の鯉」になってしまうような授業研究会も少なくありません。附属中学校で学んだことは、「授業者のためになって」

「気軽に公開できる」公開授業と授業研究会でした。授業に困ると公開授業をして、見てくださった先生方の言葉を次の授業に活かす。そんな授業研究を進めていくためにどうしていったらよいかを、今後の研究で考えていきたいと思います。今年本校でも一人一公開授業、部会による授業研究会などが行われていく予定です。その研究の推進に少しでも役に立てたらと思っています。まずは気楽に授業公開をしていこうと思っています。よろしくをお願いします。



### 永廣 裕子 ながひろ ゆうこ (附属中学校)

今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました永廣裕子です。現在、福井大学教育地域科学部附属中学校に勤務しています。教科は理科で、3年生の担任、科学部

顧問をしています。これまで、武生第三中学校、大東中学校、足羽第一中学校に勤務させていただき、それぞれの学校で学級経営、生徒指導、部活動指導など、貴重な経験や勉強をさせていただきました。先輩方の背中を見ながら、子どもたちと共に喜び、悩みながら無我夢中で過ごしてきました。失敗もりましたが、今でも子どもたちと過ごした日々は鮮明に心に残っています。

そして、6年前に研究校である現任校に赴任し、改めて「教育とは」「学力とは」「理科とは」などについて、じっ

くり考える機会をいただきました。現在、附属中学校では、研究主題を「学びをつなぐ《探究するコミュニティ》」とし、「主題-探究-表現」型の授業研究、「探究」と「コミュニケーション」をキーワードとした協働探究学習の研究に取り組んでいます。

研究体制は、研究の方向性をコーディネートする研究企画、教科を越え4～5名で構成される4つの部会(週1回)、研究を全体で共有し協働で話し合う教育実践研究会(年間20回)を連携させながら、学校全体が同じ方向を向き、研究に取り組めるような組織となっています。部会毎に提案授業、授業公開なども行っていて子どもたちの学びについて話し合い、学び続ける教師の集団を目指しています。

教科の理科では、子どもたちの発意を大切にしながらロングスパンでの協働探究学習について取り組んでいます。

どのような授業展開にすると、子どもたちが意欲的に学ぶのかを語り合うことも多いです。今年度も6月6日に第49回目の教育研究集会が行われました。「7年目になると、もう慣れたものでしょう。」といわれることもありますが、今年ほど悩んだ年はありません。7年目には7年目なりの悩みと辛さがありました。(このニュースレターが発行される頃には、終わってホッとしていたいののですが…)。授業を実践した後は、「こうすれば良かった」と気付き、悔やむことばかりです。でもそのような時は、同僚に今悩んでいることを語り、アドバイスをもらうことでヒントが見つかり、前へ進むことができます。このような点では、子どもたちだけでなく授業を構想している私たちも日々探究している気がします。

附属中の子どもを支えるものとしては、この他に学年運営も大切な役割を担っています。総合的な学習の時間である「学年プロジェクト」を柱として、子どもたちの協働での探究活動が行われています。強く生きぬく力の育成が目的ですが、「合意形成」を育む場として大切な学びの場ともなっているのです。これが、教科における協働の学びの中でも生かされ、「附中文化」という伝統につながっています。学年の横のつながり、先輩後輩の縦のつながりがうまく仕組みられていることで、一人一人の3年間の学びがつながり、何年もの間「附中文化」が継承されているのです。これは、子どもたちだけでなく、教師のかけでの支援があるからこそ成立しているのです。以上のよ

うな組織と支えにより、附属の子どもたちは、校訓である「自主協同」、「附中文化」を大切にしながら、「探究するコミュニティ」を繰り返しています。

本校に来て1、2年目は、慣れるだけで精一杯でした。しかし、ようやく「附属の研究が言おうとしていることはこのことじゃないかな。」と感じることが増えてきました。前任の研究主任が、「この学校に長くいるものとして今何をすべきか考えたとき、附属のこれまでやってきたことや研究について新しく来られた先生に伝えたり話を聞いたりする責任がある」と話していましたが、ようやく同じように感じられるようになりました。

教職大学院では、中学校しか経験のない私にとっていろいろな校種の先生方と実践を紹介しながら、多くのことを学ぶ機会となっています。凝り固まった自分の視点を柔軟にし広げ深めていくためにも、先生方からいろいろな事を吸収したいと考えています。また、附属中で継続して研究している「協働探究の良さ」などについて、伝えていけるといいなと思っています。

現任校は7年目であり、任期もあとわずかとなりました。今後、公立の学校に中堅教員として戻ることになりますが、この教職大学院で学校の組織マネジメントや授業改革についても深く学び、それを生徒指導や学年運営などの組織に生かしていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いたします。



## 茅田 哲也

ただ てつや (附属特別支援学校)

今年度から、教職大学院で学ばせていただく事になりました。スクールリーダー養成コース1年の茅田哲也です。どうぞよろしくお願いいたします。昨年度より福井大学教育地域科学部附属特別支援学校に勤務しております。

教師生活は、今年で26年になります。辞令をもらって、最初に赴任した嶺南養護学校に同期採用の10名と学校に挨拶に行ったことを今でもよく覚えています。学校全体の教職員の構成が若く、教職員同士の仲のよい学校で、職員室や職員寮など今日あった学校での出来事や子どものことをよく話していました。また、今でも体育大会や学校祭などで子ども達と教職員が力を合わせて取り組む姿が印象に残っています。2年目で、笑顔の素敵なことばのない自閉症の子どもを担当させていただくことになりました。最初は、なかなかコミュニケーションが取れませんでした。おんぶや手を持ってグルグル回すとよい表情を浮かべてくれました。子どもと一緒に遊ぶことを通して少しずつコミュニケーションが取れるようになり、1年後にはことばで簡単なやりとりができるようにな

りました。私はこのことがとてもうれしく感じました。嶺南養護学校において教職員と力を合わせた経験や子どもとの出会いが私の教師としての原点となっています。

次に、赴任した嶺北養護学校では、高等部に配属され校務分掌は進路指導に携わらせていただきました。子どもにかかわっていく際に、個人の考えではなく、教職員で子どものことを共通理解してチームでかかわっていくことの大切さを学びました。また、進路指導部では、よき先輩と一緒に子どもの現場実習先の仕事に取り組みました。学校の中だけでなく、学校外からの視点で子どもの育ちについて考えていくことの重要性を感じると共に、卒業生が企業に就職しても3年以内に辞めてしまう厳しい現実を知り、「自立とは何だろうか？子どもに適した進路指導とは何だろうか？」と思い、卒業後を見通して子どものことを育てていくことの重要性和難しさを感じました。

その後、福井県特別支援教育センターに赴任し、園や小中学校・高等学校の子ども達へのかかわり方や育て方について、保護者や園・学校の保育士や教職員の方と一緒に考えさせていただく教育相談の仕事に携わるようになりました。当時は、特殊教育から特別支援教育への転

換期で、発達障害の子ども達の存在が明らかになり、子ども達の存在を園や学校の先生に啓発する役割が求められました。最初は、私自身は発達障害の子ども達へかかわった経験が少なく、戸惑いを覚えながら仕事をしていました。しかし、自分で問題を解決するのではなく、子どもの姿を中心に保護者や保育士や先生方と語り合い、力を合わせることで子どもや保護者の方が元気になっていく姿を見て肩の力が抜けていきました。たくさん園・小中学校・高等学校の保育士や先生方と顔見知りになり、それぞれの現場を知り、子どものことについて一緒に考える機会をたくさん頂いたことは私にとって貴重な体験でした。今でも、ふとあの相談でかかわった子ども達はどうしているだろうかと思うことがあります。就学を前にして保護者の方が一生懸命に悩みながらも学校を選択していく姿を知り、養護学校時代は、子どもが入学してくることを当然のように思っていた自分を恥ずかしく思いました。この経験から「保護者の方の思いや願いを傾聴し、尊重して子ども達にかかわっていききたい」と思って現在に至っています。

また、特別支援教育センターでの業務改革を経験したことから、時代の流れやニーズを把握しながら組織の

在り方を考えていくことの必要性と伝統や文化を大切にしながら職員間の風通しをよくしていくことの重要性を感じるようになりました。

障害者の権利条約に批准し、社会の情勢は大きく変わろうとしています。インクルーシブ教育システムを構築するために特別支援教育をより推進していくことが求められています。そのような中で特別支援学校には、校内の子ども達がより自立と社会参加ができるように校内の実践を見つめ直していくことや「センター的機能の発揮」、「交流及び共同学習」を通して、地域の中でより重要な役割を發揮することが求められています。現在、勤務している附属特別支援学校は、子どもの姿を全職員で気軽に話し合える明るい雰囲気があり、研究について熱心に取り組んでいる学校です。同僚とともに「インクルーシブ教育の中で特別支援学校の果たすべき役割について」考えていきたいと思っています。教職大学院には、様々な校種や年代の先生方が集まっています。実践を傾聴し、自分自身の実践を語ることを通して自分自身を成長させ、少しでも附属特別支援学校に還元したいと思っています。どうかよろしくお願ひします。



## 眺野 大輔

ちょうの だいすけ (富士市立高等学校)

今年度より、スクールリーダー養成コースに入学しました眺野大輔です。教員生活20年目の節目の年に、再び学ぶ機会を得た事に深く感謝しています。現在の所属である富士市教育

委員会に勤務して6年目になります。これまでに、静岡県立中央特別支援学校に3年、県立清水南高校に4年、富士市立吉原商業高校に7年間お世話になりました。専門は数学ですが、最近、総合的な学習の時間がもう一つの専門と言えるようになってきました。

さて、私の勤務している富士市立高等学校教育推進室は、とてもユニークな職場です。その理由の一つは、教育委員会の事務局ではなく、富士市教育委員会が持つ唯一の高校である富士市立高校内にあるということです。もう一つは、その業務は、主として先生方と協働的に進める学校改革のコーディネーターであるということです。なぜ、富士市教育委員会がこのような部署を置いたのかは、富士市立高校で進められている学校改革の独自性に大きく関係しています。

富士市立高等学校は、平成23年度に前身の富士市立吉原商業高等学校から、総合探究科、ビジネス探究科、スポーツ探究科の3学科を併設し、学力に加え、探究する力、コミュニケーション能力、社会に貢献する意欲などを育成する高校として、「自律する若者」の育成

を目指す新たな教育理念に基づく高校としてスタートを切り、今年度で4年目を迎えました。特に、探究学習とキャリア教育を2つの大きな柱として教育活動が進められています。平成21年度からの準備段階では、総合的な学習の時間での課題解決のサイクルが連続する3年間のカリキュラム開発や、新たに設置する3つの学科のデザインなどが進められました。平成23年度以降は、様々な試行錯誤をしながら実践を進め、先生方との協働的で継続的なカリキュラムマネジメントにより取り組みの充実が図られてきました。この3月に初めての卒業生を送り出し、生徒達の成長を実感したことで、富士市立高校の教育の一つの形が見えてきました。しかし、この3年間の実践を通して教育理念を理解する教員が増えた一方、人事異動により毎年新たに迎える教員を学校改革の一員として巻き込んでいける体制の充実が大きな課題となっています。

このような状況の中で、私自身の未熟さを痛感し、更なる学びの機会を求めて入学を決意しました。2回の合同カンファレンスを経験し、先輩方の実践研究報告を読み、今まさに学校改革を推進する先生方と語り合うことで、自分の実践を振り返り、課題解決のヒントを得ることができています。この2年間の学びを、学校改革の更なる充実につなげたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

## ◆◆ 研究紀要・実践報告書の紹介 ◆◆



平成25年度 実践の記録

一人一人が輝き 共に学びあう

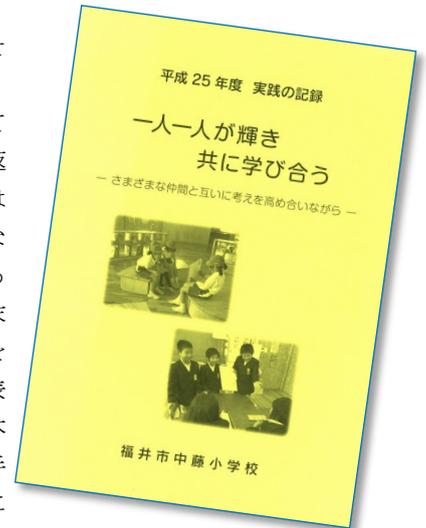
—さまざまな仲間と互いに考えを高め合いながら—

福井市中藤小学校（平成26年3月）

昨年4月に移転開校した中藤小学校にとって、平成25年度は大きな変革の一年であった。「学びの場としての学校」「生活の場としての学校」「地域に開かれた場としての学校」という大きな3つのコンセプトのもと、オープンスペースや多目的スペース、遊びの広場といった特徴的な施設を効果的に活用していくことも、大きな課題の一つとなる。平成24年度から継続した「一人一人が輝き共に学び合う」という研究主題にも、こうした課題をふまえての新たな挑戦への意欲が込められている。その挑戦の大きな特徴は「共に学び合う」ことに焦点をあてた「学級、学年を解いた授業」である。本紀要には1年生から6年生までの様々な「学級、学年を解いた授業実践、地域と共に学ぶ学習」が数多く掲載されている。他学年と交流することで自己存在感を得られた子ども、新たな仲間との関わりから積極的に学びを伝えようとする子ども、新たな学習集団の中で新たな自分を見つける子ども、といった生き生きとした姿が授業実践シートにまとめられ、そこで生まれた教師の協働の姿ま

でもが見えてくる。その一方で「学級を解くこと」ありきになっていないかという問い返しから、大事なことは「子どもたちにどんな力をつけるか」であることを再確認し、巻末には一つ一つの実践を次年度に生かす一覧表も掲載されている。本紀要は、私たち読み手にも「協働」の意義について再考する機会を

与えてくれる。これを読むことを通して、中藤小学校の先生方の意欲あふれる挑戦と一緒に加わっていただき、これからの時代に求められる新たな授業スタイルについて、共に考えていただければと思う。（小林 真由美）



福井市至民中学校 実践記録2013

学びと生活の向上

—生徒も教師も成長する学校を目指して—

福井市至民中学校（平成26年3月）

「芯化，真化，深化，進化，新化」，これらは全て「シンカ」と読む。至民中学校の平成25年度学校祭のテーマである。平成25年度に移転開校6年目を迎えた至民中学校では、これまで築き上げてきた学校文化（「学習する組織」としての学校づくり、授業研究を基軸とした教師の成長支援、地域連携と職場体験活動の伝統など）を文字通り「シンカ」する多種多様な取組を行ってきた。本実践記録にはこの至民中学校の取組と、そこでの先生方、子どもたち、地域の方々の挑戦が色とりどりに描かれている。

あなたが本実践記録を手を持つとまず、その「重み」を強く感じることになるだろう。1頁目を開くと校長先

生の温かであり研ぎ澄まされた言葉が胸を打ち、心を震わせる。そして目次を開くと、おそらく「おー！」と大きな驚き、感嘆を覚え、すぐに頁をめくり始めるだろう。本実践記録では、至民中学校の全ての先生方がそれぞれの役割や立場に基づいて、平成25年度に行われた多大なる取



組と挑戦を表現しておられるのだ。研究概要，生徒指導の取組，3つの運営部会（地域交流部会・生徒自治活動部会・総合運営部会）の取組，3つの学年の取組，キャリア教育の推進，授業実践，「ななめ糸」としての外部の力，これら全てに，それも単年度にもかかわらず，至民中学校の先生方，子どもたち，保護者の方々，地域の方々「協働」で取り組んでこられたのである。

至民中学校が生徒も教師も保護者も地域の方々も成長し学び合う「学習する組織」を打ち立てているからこそ，そして，互いに気にかけて，助け合うケアリング・コミュニティを培ってきたからこそ，これだけの稀有な取組を実践し，学校文化を「シンカ」させていったのである。本実践記録を読みながら，私は至民中学校の「外部の力」の一つとして，それから「同行者」の一人として，このことを強く感じている。

至民中学校の先生方の子どもたちに対する「丁寧な」かわり，互いに学び合い，助け合い，苦しみも辛さも，喜びも楽しさも分かち合う温かな同僚関係，地域の方々と密な連携をとり，保護者の方々も真摯に向き合っ  
て信頼関係を築いていく情熱と社会関係資本の豊かさ，これらをぜひ本実践記録を読むことで体感いただきたい。きっと，これからの学校づくりと授業づくりの方向性，そして，いま目の前にいる子どもたちにどのような大人に育ってもらいたいのかの「ヒント」が得られることだろう。（木村 優）

## 研究 紹介

# 水辺の安全について

福井大学教職大学院 准教授 稲垣 良介

日ごと気温が上昇しています。水辺の恋しい季節到来です。わたしの研究テーマに「水難事故防止教育」があります。そこで，学校関係者の方を念頭に，この時期だからこそ参考にしていただければと思うことを記します。

生徒が校区の河川で転倒し，骨折してしまいました。「川の石が滑るなんて，知らなかった・・・。」という生徒の言葉に驚きました。全校生徒に聞き取り（調査）した結果，生徒の河川での水遊びの機会はかなり脆弱であること，水遊びの希望者が少なくないことが分かりました。これは，初任の中学校での出来事です。当時，授業で着衣泳を指導していたわたしはショックを受けました。

着衣泳について少し説明しておきます。日本では，水難事故による死者数が800人前後で推移しています。また，水難事故の行為別死者数の構成比では，通行中，作業中などが上位であり，服を着たままで不意に水中に身を投げ出される場合が多い特徴があります。そこで，不意に服を着た状態で水中に身を投げ出された際に，パニックに陥らず，背浮きの状態で呼吸を確保したり，安全

な場所へ移動したりする術を身につけさせるために行われる着衣泳です。

話を戻します。生徒の言葉をきっかけに，実質的に水難事故防止に資する授業を考えました。水難事故は発生数に対する死者数の比率が高いこと，中学生以下の子どもは河川での水難事故死者数が最多であること，日本の河川は欧米のそれよりも勾配が急であること等，「教材化」の視点がいくつか挙がりました。結果，実際に河川で授業をすることにしました。河川で着衣泳なんて！とお叱りをうけそうです。安全への配慮が重要であることは間違いありません。ただし，実際には，ひざ下の浅い箇所で行かせたり，寝転ばせたりするだけで十分意味があります。「危険」なことをさ



せるわけではありません。さて、河川での授業後の感想をセンテンスごとにまとめ検討しました。生徒は、①「水は冷たい」、②「ごつごつして歩いて歩にくい」、③「浅いところと深いところがある」、④「流れが速い」ことを体験的に理解（記述）していました。これら（①水温、②河床、③水深、④流速）は、河川の水難事故の4原因、すなわち①心臓麻痺、②転倒・転落、③深みにはまり、④水流に流され、と密接に関連する河川の要素と合致します。つまり、河川の危険要素を着衣泳（歩行、寝転ぶこと）によって体感させることで「河川の危険性」を認識させることにつながるのです。また、河川での着衣泳前は、河川に対して「危険」と感じるほど「親しみがない」という“負の相関関係”であった生徒の認識が着衣泳後は両者を別事象と捉えることも分かってきました。よって、河川での着衣泳は、生徒に危険性を理解させるだけでなく河川に対する親しみをもたせる機会となる可能性があるという指摘ができます。

次に、プールでの着衣泳についてです。プールで行う着衣泳は、水中に身を投げ出された際の「対応方法」を指導します。ただし、子ども達は「対応



方法」を学ぶだけでなく、「原因療法」的な認識を変化させています。水難事故は未然に防止することが肝要ですから原因療法的な学習効果は着衣泳の重要なポイントとなります。人がリスクを認識してから実際の対策行動をとる過程にはいくつかの段階があるのですが、着衣泳によって児童の水難

事故に対する原因療法的な効果を「リスク認識」と「対策実行認識」から調べてみました。すると、直後には著しい学習効果が表れるのですが、50日後には一部を除いて元の水準に戻っていました。一般に、学校では7月中旬に着衣泳を指導します。着衣泳で学習した効果が50日間持続すれば、夏休みの期間をカバーすることになることから、50日間には意味があります。どうしたら着衣泳直後に表れる効果を持続できるのでしょうか？そこで、小学5年生を対象に着衣泳の「事前・事後指導」を実施しました。着衣泳を学習する意味や、振り返りの時間を設けたのです。すると、直後に加え、50日後にも学習効果が持続することがわかりました。多くの先生方が経験的に承知していることと思うのですが、家庭で水難事故の会話をする子どもは会話しないよりも高い学習の効果が期待できることもわかりました。短学活の時間を利用して振り返りをさせたり、学級通信で家庭に対して話題提供したりすることはとても意味のあることです。

公の機関はとかくリスク回避の為に、危険要因から遠ざける傾向、一例えば、「川では遊んではいけません！」のような指導ーが見受けられます。これだけでは、自然の中で遊びたいという子ども達の欲求に応えられないばかりか、経験を通して学ぶ機会そのものを摘み取ってしまうと思うのですが、いかがでしょう。

最後に、より積極的なリスク対策を促すため、救命胴衣を用いて授業をさせていただいています。ご興味をもっていただける方（学校）、お気軽にご連絡ください。

連絡先 : [inagaki@u-fukui.ac.jp](mailto:inagaki@u-fukui.ac.jp)

# 書評

教育科学研究会編 講座「教育実践と教育学の再生」第1巻

## 「子どもの生活世界と子ども理解」

2013年4月 かもがわ出版 2,800円+税

本書は教育科学研究会（略称「教科研」）が戦後1952年に再建後、60周年を記念した企画で、全5巻・別巻の第1巻として出版されたものである。編集委員の代表である田中孝彦氏（武庫川女子大学）は日本臨床教育学会の会長であり、本ニューズレターの第60号（2014.03.01）にも「巻頭言」を寄せている（『「カンファレンス的学習」とTeacher Educatorの課題』）。本講座のタイトルを紹介すると、第2巻「教育実践と教師その困難と希望」、第3巻「学力と学校を問い直す」、第4巻「地域・労働・貧困と教育」、第5巻「3・11と教育改革」、別巻「戦後日本の教育と教育学」であり、現在別巻を除きすべて出版されている。「刊行のことば」には以下のメッセージが語られている。

「日本の戦後史のなか、教育科学研究会は、子どもと教育実践と社会をつなぐ視角をもって研究活動を進め、特に教育実践と教育学研究の交流と協働を重視してきました。厳しい政治・社会情勢に抗する市民の協働が生まれようとしている今、それに見合う教育実践・研究の質とあり方の機軸を提示することが求められています。／私たちはここに『講座 教育実践と教育学の再生』を刊行いたします。本講座が、教育についてのより広く深い論議と研究の、そして安全で平和な社会への転換の道を探るための素材となることを願っています。」

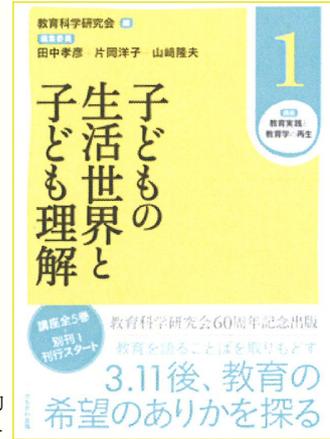
本書の「はじめに」で田中氏は「『子ども理解』のための新しい共同へ」と題して一文を寄せ、その中で本書の意義を次のように述べる。

「実際に、今日の日本の社会においても、一人ひとりの子どもについての理解を深めようとする、親・保護者たち、福祉・医療・心理臨床などの諸領域で働く援助専門職の人たち、学校の教師・職員たちの実践的な模索が展開されている。また、これらの人々の実践的模索に着目し、その広がりや深まりを支えようとする研究者たちの理論的模索も行われている。そして、これらのおとなたちの共同の試みも始まっている。今日の教育

学には、このような働きに徹底して光を当てることが求められている。」（2頁）

本書の構成は、第1章 今日の子どもの生活世界とその理解／第2章 子どもと歩む親・援助者のまなざし／第3章 教師たちの子ども理解の模索／第4章 子ども理解の焦点、であり、執筆者は教師・研究者及び諸領域で働く援助専門職の方々等である。今日の子どものをどうとらえるのか、そしてどのように理解し支援していくのかについて、様々な立場からの問題提起が示されている。筆者は其中で、第2章の「わが子の“嵐”と向き合う―「非行」と支え合う親たちの子ども理解―」に注目した。執筆者は「『非行』と向き合う親たちの会事務局長」の春野すみれ氏である。この「親たちの会」は全国各地に結成されており、福井でも2005年2月に「ふくい『非行』と向き合う親たちの会」として結成された。春野氏自身の子どもさんが「非行」に走り、その現実と向き合いながら「子ども理解」に至る壮絶なプロセスがご自身の思いや、ほかの方々の事例（生の声）として紹介されている。福井での会も今年9年目を迎え、組織・管理上も新たに再編し、会員制をベースにした新たな組織として再出発した。この間、北陸3県の「親たちの会」も含めて、子どもたちの理解と支援の様々な組織が協働して“集い”（親と子のリレーションシップほくりく）を3回開催してきている。2011年が石川県、2012年が富山県、そして2013年9月には福井県で「親と子のリレーションシップほくりくinふくい」を福井大学で開催した。今年の第4回目は10月25日（土）に石川県地場産業振興センター（金沢市）で開催の予定である。

本書の第4章「子ども理解の焦点」で、田中孝彦氏は「生活を綴ることと自己を形づくること―子ども理解の深化と教育学の再生のために―」という論稿において、ブルーナーの『教育の過程』（1960年出版・1963年翻訳／岩波書店）に触れながら、ブルーナー自身が自らの研究の歩みをその



後の研究活動等を通して厳しく反省し、アメリカにおける「貧困の発見」と公民権運動によって子どもたちの人間理解と支援の重要性について再認識したことを紹介している（295頁。ブルーナー『教育という文化』1996年、翻訳2006年）。

本書の「子ども理解」というテーマは非常に深い。私たちは同じように、「教師理解」「保護者理解」、そして「研究者理解」…が必要なのではないだろうか。（教職大学院 森 透）

## 公開保育のご案内

研究主題

### 学びの芽生えを育む

—自分から遊びたくなる環境づくり—

### 講演会

#### 「学びの芽生えを育む保育と環境」

講師 無藤 隆 先生

（白梅学園子ども学部 教授 同大学院研究科長）

期日 平成26年7月5日（土） 会場 福井大学教育地域科学部附属幼稚園

#### ■当日日程

9:00	9:20	11:10	11:20	12:00	13:00	14:45	15:00	16:00	16:10
受付	公開保育	休憩	全体会	昼食	学年別分科会	休憩	講演会	閉会	

■申し込み／申込用紙は本校のホームページから

<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzokuyo/>

ファックスでお願い致します。

■参加費／500円

■送り先／〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

福井大学教育地域科学部附属幼稚園

TEL：(0776) 22-6687

FAX：(0776) 22-6718

※お申込締切りは、平成26年6月20日（金）



21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て  
子どもたちの生活と成長を支える  
教師の実践力を高めるために

# OPEN CAMPUS Petit!

開催日：7月12日（土）・10月18日（土）・

10月25日（土）・11月15日（土）・11月22日（土）

時間：9:20～14:20

会場：福井大学教育地域科学部1号館6階コラボレーションホール

### 教職大学院説明会開催致します!

大阪会場

梅田センタービル（大阪市北区中崎西2丁目4番12号）

8月2日（土）13:30～16:00 1階会議室G

11月8日（土）13:30～16:00 1階会議室F

京都会場

メルパルク京都（京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町676番13）

8月3日（日）13:30～16:00 6階会議室4【桃】

11月8日（土）13:30～16:00 5階会議室2【桂】

名古屋会場

Time Office名駅（名古屋市中村区名駅2丁目4番12号アストラーレ名駅3階）

8月23日（土）13:30～16:00 3階 TimeB

11月9日（日）13:30～16:00 3階 TimeB

東京会場

FUKURACIA東京ステーション（東京都千代田区大手町2-6-1 朝日生命大手町ビル5階）

11月16日（日）10:00～12:00 6階会議室E

福井会場

福井大学文京キャンパス（福井市文京3丁目9-1）

12月20日（土）15:00～ 教育地域科学部1号館6階

コラボレーションホール

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻

教職大学院

#### ■お問い合わせ・申し込み方法

氏名・所属・連絡先メールアドレス・参加希望日を明記の上、福井大学教職大学院 [dpdfukui@yahoo.co.jp](mailto:dpdfukui@yahoo.co.jp) までメールにてお申し込みください。

なお、メールの件名には「オープンキャンパス参加」と明記してください。



## 平成27年度 教育学研究科学生募集スケジュール (予定)

事項	平成27年度(第1回)		平成27年度(第2回)		平成27年度(第3回)	
	教職大学院の課程	修士課程	教職大学院の課程	修士課程	教職大学院の課程	修士課程
学生募集要項の公表	5月下旬		5月下旬		5月下旬	
事前説明会	7月5日(土) 13:00~17:00		12月20日(土) 13:00~17:00			
入学願書受付	9月2日(火)~5日(金) 最終日17:00まで		1月9日(金)~15日(木) 最終日17:00まで		2月26日(木)~3月2日(月) 最終日17:00まで	
ガイダンス	9月13日(土) 10:00~12:00	実施せず	1月31日(土) 10:00~12:00	実施せず	3月7日(土) 10:00~12:00	実施せず
学力検査	9月20日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験		2月7日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験		3月14日(土) 午前(9:00~)筆記試験 午後(13:30~)口述試験	
合格者発表	10月1日(水) 10:00~		2月17日(火) 10:00~		3月20日(金) 10:00~	
入学手続	12月10日(水)~16日(火) 9:00~17:00		2月26日(木)~3月2日(月) 9:00~17:00		3月23日(月)~25日(水) 9:00~17:00	

### Schedule

6/21 sat-6/22 sun 実践研究福井ラウンドテーブル 2014

7/5 sat 合同カンファレンス (A日程)

7/12 sat 合同カンファレンス (B日程)

#### 【編集後記】

6月に入り、それぞれの場で少しずつ実践が動き始めた頃でしょうか。附属中学校の研究集会では修了生数名に再会でき、修了後も集い共に学ぶ場があることを嬉しく思いました。6月のラウンドテーブルでも、多くの方々と様々な実践に学ぶことを楽しみにしています。(岸野)

教職大学院Newsletter No.64

2014.6.21発行

2014.6.21印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp







